



大学院重点化計画の最終年次にあたって

医学部長 井上 芳 郎



平成10年4月より大学院重点化への改組が始まりましたが、平成12年度を最終年次の計画として病態制御学専攻と癌医学専攻の改組を概算要求いたしました。これが認められますと来年

4月から医学部の講座は全て大学院の基幹講座に移行し、大学院医学研究科として6専攻、18大講座、8協力講座及び入学定員109名の組織になります。

大学院重点化は、(1)学術研究の高度化と優れた研究者養成機能の強化、(2)高度専門職業人の養成機能・社会人の再教育機能の強化、(3)教育研究を通じた国際貢献、を押し進めるために高等教育機関をさらに活性化するための国策として行われました。従いまして、私たちは今一層の教育・研究・診療の実績をあげるべく努力が求められます。

大学院重点化に伴い大学院の教育・研究の活性化のためにまず重点化構想に沿った人事を進めていく必要があります。文部省からは教育・研究体制としての教授選考、助教授任用の人事が迅速に進められないのは入学志望者に対する契約違反行為であるとまで指摘されました。新設の分野にありましては研究室の確保と関連がありますが、重点化の際の選考方針に則って迅速に、かつ立派な人材を選んでいきたいと考えています。

大学院の学生入学定員は1学年109名、総数で436名になります。その3分の2以上は臨床系大学院生です。平成9年に実施された外部評価でも指摘されましたが、臨

床系大学院生が基礎系研究室で研究することが大学院の研究能力を高めることとなります。臨床医学、基礎医学、生命医学の垣根を越えお互いに交流しながら新しい研究分野を開拓していくことが重点化された大学に期待されております。7月の部局長会議の後で北海道大学における文部省科学研究費の採択状況の分析結果の説明がありました。医学部では基盤研究(一般研究)の採択数が多い反面特別推進研究や特定領域研究の採択率が低いという結果になっています。共同研究による大型の研究費を獲得することが今後の課題と感じました。

大学院の教育研究に加えて忘れてはならないのは医学部教育です。高等学校の教育内容は私たちが学んだときは大分様変わりしており、履修内容、量ともに軽くなっております。平成13年には学習指導要領が変更になり、更に軽くなるとのことです。これは北大の学士課程の教育システムの根幹に関わることであります。全学教務委員会では対応策の検討が始まっています。学部教育の内容低下はそのまま、大学院の教育研究能力の低下につながることであります。医学部においても各教科の到達目標を設定して、大学院や卒業後初期臨床研修につながる教育体制を敷くことが肝要です。学部教育、大学院教育研究と教官の負担は増えることが予想されますが、今までとは違った教育技法を工夫して、効果的かつ効率的に教育することが求められます。

新しい教育研究体制のもとで北海道大学らしい進取の気性に富んだ、ユニークな研究活動が展開されることを願っています。

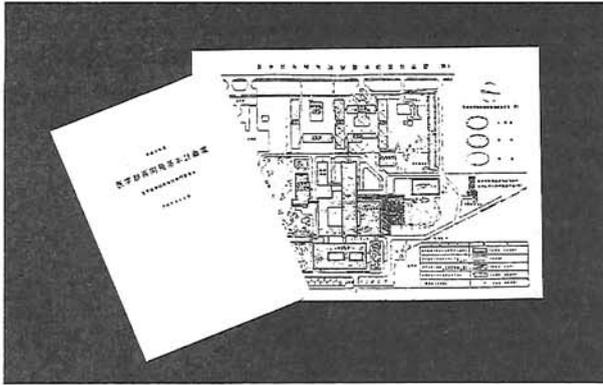
医学部再開発(管理研究棟新設)計画について

再開発検討専門委員会・委員長 本 間 研 一

懸案となっている医学部再開発(計画)の現状について報告いたします。これまでの経緯を簡単に述べますと、現在の医学部教育研究棟はその主要部分が昭和42年から43年にかけて建設されたもので、30年を経て老朽化が深刻な問題となっているうえに、講座の新設等によって基準面積(教官、学生等の人数から割り出された必要面積)が約8,000㎡も不足しています。医学部では十年ほど前から再開発検討委員会を設置し、先行している附属病院の再開発に合わせて新しい教育研究棟を構想してきました。しかしその間、北大のキャンパスプランの策定や大学院重点化など医学部を取り巻く情勢は大きく変化したため、再開発プランを再検討する必要性に迫られました。平成9年7月に新しい委員会が設置され、私が委員長をお引き受けすることになりました。

教育研究施設の再開発では、教育研究理念に基づいた構想(ソフト面)とその構想を実現するための建物のデザイン(ハード面)を決める必要があります。委員会では

は、まず再開発のソフト面についての検討を行い、再開発の基本方針として「医学部再開発基本計画案」を作成し、案は平成9年12月の教授会で承認されました。その概要を簡単に説明します。再開発の方針とし、第1に現在年次進行中の大学院重点化に対応した教育研究施設をあげています。特に、大学院初期教育のための実習室や講義室、情報処理室や大型機器室が計画されています。第2は、医学部一貫教育(6年間)に対応した学部教育施設の建設です。従来の講義室や実習室の他に、学生の自主的な勉学を支えるためのセミナー室、情報処理室、マルチメディア室、厚生施設などが構想されています。これら大学院教育と学部教育に対応する2つの施設は、医学部再開発の目玉として位置づけられております。研究の場である講座研究室に関しては、現在の床面積を1講座(旧)当たり約100㎡増やすとともに、共同研究や研究手法の変化に合わせて実験室のレイアウトを自由に変更することが可能になる方策を検討しております。ま



医学部再開発に関して

た、教育研究をサポートする図書館、動物実験施設、教職員の厚生施設等の再開発も同時に構想されています。一方、北大マスタープランで策定されたメディカルゾーンには、医学部（附属病院）、歯学部（附属病院）、薬学研究科、免疫科学研究所、アイソトープ総合センター、医療技術短期大学の各施設が入ることになっています。従って、教育研究あるいは医療における連携を推進するため、また建物の機能的配置、土地の有効利用などのた

めにも、メディカルゾーン全体としての再開発を考える必要があります。これに関しては部局長レベルでの話し合いが持たれています。平成10年からは、「基本計画案」をもとに、建築の専門家の意見も聞きながらハード面の構想を練ってきました。条件設定の異なる複数の案が固まってきており、状況がどの様に変化しても対応できるようにしようと考えています。再開発の場所に関しては、以前は附属病院の南、旧外来棟跡地が有力な候補地でしたが、歯学部附属病院の再開発とのからみで断念した経緯があります。附属病院へのアクセスを考えると、現在教育研究棟が建っている場所が第一の候補地となりますが、なお不確定な要素もあります。現在、附属癌研究部門が免疫科学研究所と合併し新研究所を設立する構想がありますが、再開発プランでは新研究所は医学部に隣接して建設することになっています。またキャンパスマスタープランでは、中央道路を歩行者専用としたり、13条門を閉鎖するなど医学部再開発に直接影響することが決められています。

しかしながら、国家財政が厳しい現状にあって、本再開発計画案が計画どおり実現される可能性については、今一つ不明瞭であります。これらの現状や、制約を考慮しながらも、一方では後顧の憂いの無いように、慎重に検討を続けています。

医学展を終えて

第38回医学展実行委員・医学部5年 武重宏呂修

医学展はそれなりの資金と人手とを要する大きな企画です。医学部の学生だけで楽しむばかりではなく、市民の方に来ていただくという公的な面を持っています。今年は5年生（77期）の学生が実行委員会を組織し、その企画と運営を担当し、春休み前に今年の医学展のテーマ「あなたのカラクリおしえます」を決めることから仕事をスタートしました。私たちにとり、こうした大きな行事の運営は初めてのことで不安もありました。しかし、こうして医学展を無事に終えることができたのは、私たちも一生懸命に取り組みましたが、多くの方々からの援助があったからだと思えます。

では、6月5日、6日に行われた第38回医学展について簡単に紹介します。

「医学生による市民のための検査体験会（市民検）」では、問診、検査を通して、一般の方にそれらの意義を知っていただき、さらに交流を図りました。昨年の実績から、当初250部のパンフレットを用意していました。ところが予想を上回る来場者があり、たちまち品切れ、急遽増刷しました。結局2日間で700人も来場があり大盛況でした。今年の新企画である「実験体験会」では、左右あるいは上下が逆に見える眼鏡を用いた視覚実験、また錯視の実験を体験してもらいました。また、ゲーム感覚の記憶実験も行われて、好評を博し、延べ300人の来場がありました。

同じく新企画である「市民のための救急救命法体験会」では、侵襲制御医学の南崎先生の講義、指導の下、約60人の方が救急手技を、人形を用いて学びました。

5日は聖路加国際病院理事長の日野原重明先生がおいでになりました。昼食会をかねた交流会の後、講演会が行われ、200名ほどの熱心な聴衆が集まりました。「高度先端医療と癒しの医療—生と死にふれて—」と題し、我が国の医療の抱える問題とその展望についてお話した



日野原重明先生の講演



市民のための救急救命法体験会

きました。一般の方のみならず医療従事者に対して、時としてユーモアを交えながら、とても感銘深いメッセージを送っていただきました。日野原先生は87歳という高齢ですが、大変お元気で、その日は東京からお一人でいらして日帰りなさいました。

また同じ日には、元アルペンスキー日本代表の川端絵美さんの講演会もありました。現役時代の秘話などをビデオ映像を織り交ぜながら語っていただきました。川端さんは現在スキー解説者として活躍中で、それだけにお話も上手で、非常に楽しい講演会となりました。

展示発表、医療問題研究会による「海外医療研修報告」、そして東洋医学研究会による生薬展示と企画展示には、

両日、多くの市民の方が来場され、熱心に研究展示を見入っていました。

不慣れゆえに反省点も多くありますが、多くの市民の方に来場していただき、今年の医学展も成功裏に終わることができました。医学展実行委員会を始め、多くの学生が一生懸命に取り組みました。そして、多くの方々の援助に支えられました。同窓会、学友会、そして各講座からは多くの援助を頂きました。また、教務掛の皆さんには非常にお世話になりました。そして、市民の方々無しには医学展はありえませんでした。皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

平成11年度医系運動会

教務主任 西 信 三



「二人三脚」の1コマ

学部4年生(78期)が主体となり、6月25日(金)午前10時から本学陸上ホッケー場で開催されました。

約300名の学生参加の下で、開会宣言が行われ、続いて大会長に代わり私西教務主任の挨拶及び医療短大森田部長からの挨拶があり、引き続き選手宣誓が行われ、各種競技がスタートしました。

あいにく、小雨の降る天気となりましたが、医短の学生、各クラブチーム、医局教職員の皆さんの参加もあり、競技に盛り上がりを見せていました。

総合優勝は、医学部3年生を中心とした赤チームとなり、7チームの参加があった医局対抗リレーでは、生体構造解析学分野(旧第2解剖)チームが優勝しました。

また、運動会終了後の16時30分から中央食堂でビアパーティーが開催され、各学年の学生が和やかに親睦を深める機会となりました。

研究室・教室の再配分について

実験室等調査・調整検討委員会委員長 小林 邦彦

1) 医学部2-3年生用ロッカーの移転について

平成8年の医学部加齢制御医学講座と生体医工学講座の新設、癌研細胞制御部門の研究室確保のため、従来医学部内にあった学生用ロッカーは旧看護婦宿舎に移転されていました。しかし、医学部との距離が長いことなどのため設置後からの利用は極端に悪く、その移転が望まれていました。この度、医学部2-3年生用ロッカーが医学部北研究棟一階東側の局所解剖実習室内に設置することになりました。秋頃までには使用可能になると思います。他の学年についても学生の意見を聴取して対応を考えています。

2) パソコン室拡張について

医学部学術情報委員会委員長(守内教授)から大学情報処理教育センター経由の本年度の医学部配置のパソコンが60台に増設される事が明らかになりました。これまでは10台が設置されており(管理棟、医学部生理・薬理学実習室)、さらに50台の計60台を運用させる部屋の確保が委員長から要望され、従来の生理・薬理実習室とその向いにある生化学・細菌学実習室、その隣の病理標本室(何れも管理棟2階)、及び旧看護婦宿舎を当てることに

なりました。

3) 大学院大学の新分野・部門の研究室確保について

大学院重点化にともなう新設6分野の研究室確保を医学部中央研究部部长・石橋教授、医学部再開発検討専門委員会委員長・本間教授とともに調整中ですが、差し当たりこの10月1日に赴任する機能分子学分野の澤口教授の研究室として、医学部東北棟4階の中央研究部の生気象部門と神経機能部門の一部を当てることになりました。

他の新部門の研究室確保に関して、病理学第一(吉木教授)、第二(長嶋教授)講座の病理標本室の縮小・開放など多大な配慮を頂いております。標本室の縮小のために、標本の保存法の改良、また一部の標本を他に移転する作業等がありますが、この点に関しては医学部として対応する予定とのことです。なお、研究室確保の一貫として倉庫の確保が問題となりましたが、旧アイソトープセンターの整理・整頓で十分そのスペースが得られると考えられることから、関係各所の速やかな対応が望まれます。

病院の動き

医学部附属病院に本年度導入された高額機器について

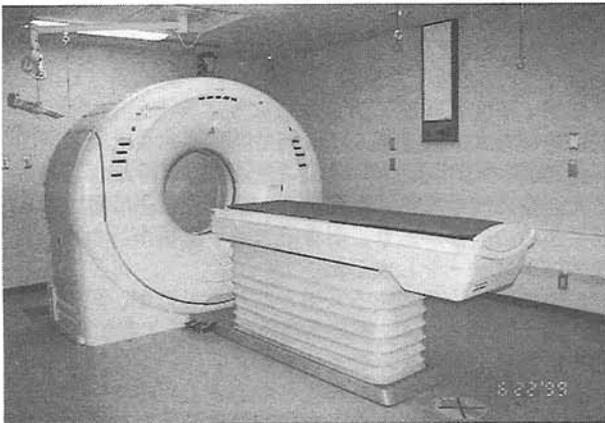
脳科学専攻神経機能学講座精神医学分野教授 小山 司

平成10年度の医学部附属病院に導入された高額医療機器および設備は以下のものです。

◎平成10年度歳出概算要求関係

中央診療棟再開設備

3,286,000千円



高速動態画像診断治療システム

病院再開の最後に中央診療棟の再開が残っていましたが、その最終段階として放射線部診断部門の設備として下記を整備しました。最新の高精度診断装置で検査時間を短縮することが可能となります。現在、厚生省からの承認待ちの段階にあり、7月から稼働する予定です。

- ① デジタル・情報処理システム
- ② 全身用高速螺旋CTシステム
- ③ 高速動態画像診断治療システム
- ④ 生体内機能代謝解析システム
- ⑤ 循環器対応同時2方向X線透視撮影システム
- ⑥ IVR対応血管造影システム
- ⑦ 多臓器対応X線透視撮影システム

◎平成11年度補正予算関係

【第一次補正予算】

橋本内閣の景気対策として組まれたものであり、本院としては情報通信基盤事業に通じるものと、各診療科等から概算要求のあった設備を導入しました。

1. 病院特別医療機械整備費

1,657,279千円

① 脳機能イメージングシステム

473,567千円

検査部に設置された生体磁気計測システムと手術部に設置された脳神経外科手術支援用ニューロナビゲーションシステムよりなります。生体磁気計測システムは、脳

神経細胞の活動によって発生する微弱な磁場を測定し、脳磁図を作成します。3次元的にMRI等により得られた形態学的情報に重ね合わせることで、てんかんなど神経細胞の異常活動部位や正常脳機能の局在を同定することが可能となります。

② 染色体画像解析システム

41,528千円

検査部に設置された本装置は、先天性染色体異常検査に必要な核型作成を行い、遺伝子の欠損・転座を微弱な傾向シグナルで確認し、癌遺伝子の増殖を検出するものです。臨床的要求が高まりつつある本検査を高速・高精度で簡便に行うことが可能となります。

③ 患者循環動態監視情報システム

407,955千円

救急部、及び集中治療部に設置された本装置は、重篤患者の心電図、呼吸、血圧などの情報を秒・分単位で一元的に把握・記録するものです。患者の継続した生体情報の管理が可能となり、適切な治療と処置に生かされます。

④ 心血管機能計測・補助循環システム

128,625千円

循環器内科に設置された本装置は、X線やポリグラフによって必要と診断された急性心疾患患者に対して補助心臓としての機器を用いるものです。これによる救命救急治療が可能となります。

⑤ 内視鏡画像ファイリングシステム

62,969千円

内視鏡診療部に設置された本装置は、既存の内視鏡装置より得られた画像を光磁気ディスクに蓄積し、ネットワーク運用するものです。内視鏡データの活用を円滑にし、若手医師の教育や患者説明により役立てることができるようになります。

⑥ 多機能超音波心血管機能計測システム

191,794千円

第一内科と循環器外科に設置された本装置は、虚血性心疾患や弁膜症などの心疾患において心臓の形態及び血行動態を3次元的に高画質で記録するものです。心疾患の正確な早期診断が可能となります。

⑦ デジタル脳波ファイリングシステム

350,841千円

検査部を中心に精神科神経科、小児科、神経内科、脳

神経外科、リハビリテーション科の各科に設置された本装置は、高精度デジタル脳波計により記録された脳波データを、超高速医療情報ネットワークシステムを介して一元的に管理・運用するものです。各端末から脳波データを高速に検索し、解析・診断することが可能になり、診断精度の向上と治療の適切化につながります。

2. 超高速医療情報ネットワークシステム
514,850千円

従来の業務用ネットワークである病院情報システム(HIS)と画像情報システム(PACS)の二つを統合し、次期医療情報システムの基盤となる高速医療情報ネットワークが敷設されました。これにより、医事会計システム、オーダーシステムを含むHIS系情報と、CT・MRI等の比較的大きな画像写真や脳波・脳磁図などを含む医用大容量デジタルデータを院内各所に超高速で転送可能となりました。

【第三次補正予算】

小淵内閣の景気対策として組まれたものであり、本院としては各診療科から要求が多かった超音波診断装置と、材料部から要望があった滅菌システムを導入しました。

大型特別機械整備費並びに病院特別医療機械整備費
277,000千円

① 超音波総合診断システム
178,328千円

第二内科、循環器内科、第二外科、整形外科、産婦人科、放射線科、総合診療部の各診察室に新規あるいは更新機器として設置されます。

② 滅菌システム
98,672千円
以上です。

科学研究費採択状況

平成11年度の科学研究費補助金の交付がこのほど決定になりました。内訳は下表のとおりとなっています。

これを10年度と対比した場合、件数では3件の減となっていますが、交付額では44,600千円の増となっています。なお、採択率は新規・継続を含み、35.0%（10年度は40.4%）で年々減少の傾向にあります。

(単位千円)

年度別 研究種目	11		10		前年度比	
	件数	交付額	件数	交付額	件数	交付額
特定領域研究(A)(1)	1	22,000	2	23,700	-1	-1,700
〃 (A)(2)	7	44,700	6	34,700	1	10,000
〃 (B)(2)	2	25,900			2	25,900
基盤研究 (A)(1)			2	6,100	-2	-6,100
〃 (A)(2)	9	79,800	9	103,300		-23,500
〃 (B)(1)	1	5,400			1	5,400
〃 (B)(2)	31	54,100	24	13,100	7	41,000
〃 (C)(2)	29	39,900	34	45,000	-5	-5,100
萌芽的研究	13	13,700	12	11,800	1	1,900
奨励研究 (A)	8	9,100	15	12,300	-7	-3,200
合計	101	394,600	104	350,000	-3	44,600

お知らせコーナー

第3回北海道大学医学部学生教育ワークショップの開催について

第3回北海道大学医学部学生教育ワークショップを開催します。

テーマ 21世紀の医学教育－teaching から learning へ

日時 8月19日(木)～21日(土)

場所 定山溪温泉「青巒荘」

北大オープン・ユニバーシティの開催について

本学では、大学受験者によりよい北大の情報を提供するために、8月2日(月)オープン・ユニバーシティを企画し、これに各学部が参加することになりました。医学部では、各講座等のご協力を得て、次のとおり企画に参加します。

8月2日(月)9時30分及び13時30分の2回、研究室見学及び臨床大講堂において参加者との質疑応答を企画しております。(7月21日現在 参加申込者 139名)

全国医学部長病院長会議東北・北海道ブロック会議を開催



全国医学部長病院長会議東北・北海道ブロック会議

全国医学部長病院長会議(東北・北海道ブロック会議)が、4月26日に北海道大学を当番校として、ホテル札幌ガーデンパレスで開催された。

当日は、東北・北海道地区の9大学の医学部長及び病院長15名が出席し、北海道大学の井上医学部長の挨拶の後、「アドミッション・オフィス入学について」、「大学院教育について」、「診療情報の提供について」、「臓器提供病院としての情報提供について」等をテーマに協議が行われた。

それぞれのテーマが、各大学が当面している問題だけに、予定時間を超えて、活発な意見交換や情報交換が行われた。

医師国家試験について

第93回医師国家試験は、本年3月20～21日に実施され、本学部を3月に卒業した110名が医師国家試験に挑み、104名が合格しました。合格率は94.5%となっております。ちなみに、昨年の合格率は、97.7%、1昨年91.4%及び3年前は97.1%でした。なお、本学部の既卒者で、試験に合格していない者の累計は、16名と推定されますが、うち5名が受験し3名が合格しております。

また、全国の受験者8,692名中、合格者7,309名で、全国平均合格率は、84.1%でした。新卒者の合格率上位5大学は、浜松医科大学の98.0%、広島大学96.8%、慶應義塾大学95.9%、徳島大学95.8%、東北大学94.9%となっております。

編集後記

今あらゆる分野において、21世紀に向けた議論が盛んになっています。世界史的にはソ連の崩壊後、世界が資本主義一色になるにおよんで、宗教や民族がらみの複雑な地域紛争が続発し、環境問題や金融システムの危機が世界的なものとなりました。そのボーダレスなグローバル化は、今や外部環境や経済現象にとどまらず、文化的な事象や人間の心性をも深く巻きこんで進行しているかにもえます。

われわれの医学部をめぐる現況もその例外ではありません、この医学部広報第5号にも「大学院重点化」、「附属病院における高度先進医療の推進」、「医学部の再開発計画」など医学部が当面している問題に関わる記事が満載されています。

医学部を構成する一員として、これらの変革を単なる事実として傍観するのではなく、自らの問題として抱えるリアリティこそが重要と思われます。この医学部広報が情報伝達の間としてのみならず、自主的な寄稿による意見交換の間としても活用され、その内容がますます豊かなものとなることを期待します。

(小山 司)

Home Pageのご案内

医学部広報は

http:
[//www.med.hokudai.ac.jp/medonly/ko-ho/index.html](http://www.med.hokudai.ac.jp/medonly/ko-ho/index.html)

で御覧になることができます。また、ご意見ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学医学部広報

発行 北海道大学医学部広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先 医学部庶務掛 電話 011-706-5003
編集委員 岸 玲子、小山 司、石倉 浩
傳田 健三、佐藤 松治